

# イベント報告



# 長岡市民交流会

## 「～復興への想い、平和への願い～」

日時:8月18日(月)14:00～17:00

会場:長岡市市民センター1階 長岡市国際交流センター「地球広場」(新潟県長岡市)

来場者:21名

### 目的

イスラエル人・パレスチナ人参加者と来場者の長岡市民が交流を通して、それぞれの地域の歴史・文化、抱える問題について理解を深めること。

具体的には、

- 交流会を、ネガティブな先入観を排しイスラエル・パレスチナ問題について考え

る契機とすること、ならびにイスラエル人・パレスチナ人参加者の「平和への願い」を伝えること。

- 「復興の街」長岡の歴史を知ることを通して、長岡の人々の「復興への想い」を理解すること。

### 内容

- ①代表挨拶・イスラエル人・パレスチナ人参加者自己紹介(15分)
- ②アイスブレイキング(言語紹介ー30分)
- ③イスラエル人・パレスチナ人参加者、交流大使によるスピーチ(90分)
- ④歓談の時間(45分)

### 今回の市民交流会の特徴:「長岡平和交流大使」

今回の市民交流会の企画において、テーマとなったのは「双方向的な交流会の実現」でした。「双方向的」とは、長岡市の方々にイスラエル・パレスチナ問題の情報を伝えることのみならず、イスラエル人・パレスチナ人参加者にも長岡市の持つ歴史・文化を伝えることを意味しています。この「双方向性」を実現するために、市民交流会当日に長岡の歴史・文化を伝えてくれるボランティアを「長岡平和交流大使」(以下、交流大使)という名前で募集しました。対象は長岡市近隣に在住の青少年とし、応募された方には事前に長岡の歴史・文化を

学ぶ研修会に参加していただき、交流会の発表に備えていただきました(研修会は計3回実施)。結果的に、7名の方が交流大使として市民交流会に参加しました(男性3名、女性4名、所属別では大学生3名、高専生:1名、高校生2名、有職者1名)。

なお、交流大使の募集・研修会の実施は日本・イスラエル・パレスチナ学生会議と長岡市国際交流センター「地球広場」の協同で行われました。また、研修会では、長岡市戦災資料館のご協力をいただきました。

## 当日の様子

交流会の冒頭では、イスラエル人・パレスチナ人参加者とイベント来場者の方の緊張を解くため、アイスブレイキングとして言語紹介の時間を設けました。具体的には、ヘブライ語・アラビア語での日常会話をイスラエル人・パレスチナ人参加者に紹介してもらい、来場者とともに練習してみました。慣れない言語の発音に苦戦しながらも、来場者の方とイスラエル人・パレスチナ人参加者は笑顔を交わしていました。

次に、今回の市民交流会のメインである、イスラエル人・パレスチナ人参加者、交流大使によるスピーチが行なわれました。イスラエル人・パレスチナ人参加者からは「平和への願い」というテーマで、イスラエル・パレスチナのそれぞれにおいて平和に貢献した人物の紹介がされました。交流大使からは、「復興への想い」というテーマで、長岡市が幾度も歴史的困難を乗り越えてきた様子、そして長岡の人々の復興の精神を紹介しました。イスラエル人・パレスチナ人参加者、交流大使、そして来場者の方々は、それぞれのスピーチに真剣に耳を傾けていました。



市民交流会の最後には、来場者の方とイスラエル人・パレスチナ人参加者が自由に歓談できる時間をもちました。イスラエル人・パレスチナ人参加者が持参したそれぞれの地域のお菓子を片手に談笑を楽しみました。



## 総評①来場者の反応、準備・実施に対する反省

今回の市民交流会において、設定された目的は概ね達成されたと言えるでしょう。

アンケートの結果を見ても、市民交流会の雰囲気について「面白かった」、「イスラエル・パレスチナに対するイメージが変わった」という意見が多数であり、スピーチの内容についても「興味深い」「参考になった」という意見を頂戴しました。

段取りについては、アイスブレイキングに十分な時間を取り、また最後に懇談の時間を設けたことによって、来場者の方とイスラエル人・パレスチナ人参加者の距離は縮まり、円滑な交流が果たされました。また、イスラエル人・パレスチナ人参加者、および交流大使のスピーチの内容は、「復興への想い」、「平和への願い」というテーマに適切であり、スライドや配

布資料の存在も内容の理解に効果的でした。

### 来場者のアンケートより

#### ーアイスブレーキングについて

・ヘブライ語やアラビア語を教えてもらえて面白かった。時間が長くて後半は飽きてしまったので、もっと短時間でも良かったと思う。

#### ー交流大使、イスラエル人・パレスチナ人参加者によるスピーチについて

・2つの地域の歴史が知れて良かった。

・映像や音楽を使って分かりやすい発表だった。イスラエル・パレスチナ側の発表のとき通訳が分かりにくかった。

・全く知らない人についての話だったので、参考になった。

#### ー懇談の時間について

・珍しいお菓子を頂いたり、イスパレの話をお聞かせしてもらって楽しい時間だった。グループが固定だったので同じ人としか話せなかった。他の人とも交流したかった。

## 「地域の特色を生かした交流」の模索の帰結として

過去の「合同学生会議」で行なわれてきた交流会では、主にイスラエル・パレスチナ問題への関心の喚起が主眼とされていました。このため、交流会のプログラムはイスラエル・パレスチナに関する内容に限定され、長岡市の方々は来場者として受動的に交流会に参加することしかできませんでした。また、イスラエル人・パレスチナ人参加者にとっては、長岡市に一週間近く滞在しているにも関わらず、長岡市の歴史・文化に触れる機会は乏しいものでした。長岡市は幕末の北越戊辰戦争、太平洋戦争時の長岡空襲、そして2004年の新潟県中越地震といった歴史的困難を経験し、その度に住民が一丸となって復興を果たした「復興の街」です。イスラエル人・パレスチナ人参加者がこうした長岡市の成熟した歴史・文化に触れられぬまま、長岡市をあとにするのは大変に残念なことでした。

以上の背景を踏まえれば、今回の「長岡平和交流大使」の試みは、市民交流会のあり方を根本的に変えるものであったと評価できるでしょう。交流大使に応募することは、来場者としてではなく交流会の内容決定にまで関与できる可能性があることを意味しています。また交流大使の存在によって、市民交流会自体が「長岡市だからこそできる」独自の内容を持ったものになりました。さらに交流大使は、長岡市とイスラエル・パレスチナのみならず、長岡市の「中」での交流促進にもなりました。前述のとおり、長岡市には歴史的困難を乗り越えてきた経験がありますが、これらの経験は世代間での継承が難しい事実があります。太平洋戦争時の長岡空襲についても、時の流れとともに人々の記憶から失われつつあります。特に交流大使の対象である若年層は戦争を経験していない世代です。今回の準備にあた

り、戦争経験者の方々のお話を聞くことによって世代間の交流の場を持てたと言えるでしょう。今回の市民交流会における試みは、開催地域に浸透し、開催地域の特色を活かした交流を模索した一つの帰結といえるでしょう。



長岡平和交流大使は、今回は初めての試みであったために実施や準備において課題を残しました。一つは、準備過程において交流大使への動機付けが弱くなってしまったことです。当初は、3回の研修会を通して交流大使が自

発的にスピーチの内容を決め、調査することが期待されていました。しかし、研修会の後に応募してきた方が多く、また、交流大使の都合が合わないなど、交流大使が準備にかかる時間が確保できませんでした。このことにより、交流大使への参加がやや受動的なものになってしまった部分があったことは否めません。募集方法や交流大使の役割などについて再検討し、今後の改善に活かしていきたいと思えます。



# 長野高校生プログラム

日時: 8月22日(金)~24日(日)

参加者: 10名

場所: 長野青少年練成センター本館(長野県長野市)

## 目的

- ①イスラエル人・パレスチナ人参加者、日本人大学生、高校生が共有できる価値を探る
- ②高校生が社会で起きていることに目を向けるきっかけをつくる
- ③事前準備を通じた、イスラエル人・パレスチナ人参加者、日本人大学生間の交流の促進

## プログラムの様子

プログラムの初めは、アイスブレイキングとして、イスラエル・パレスチナのゲームを楽しんだり、お互いの高校生活について紹介したりしました。次第にイスラエル人・パレスチナ人参加者と高校生参加者、日本人参加者間の緊張がほぐれ、和やかなムードとなりました。そのあとは夕食として外でバーベキューをしました。

夕食の後はイスラエル人・パレスチナ人参加者が紛争に関わる体験談を話しました。高校生にとって、紛争を日常的に経験している人から直接話を聞く機会はあまりないので、イスラエル人・パレスチナ人参加者の経験の中に「占領」や「自爆攻撃」、「検問所」などの、なかなか日本人には馴染みのない事象が複雑

## 内容

### 合同学生会議前の活動

- ・長野西高校で授業を実施
- ・事前オリエンテーション

### 合同学生会議中の活動

(22日)

アイスブレイキング(イスラエル・パレスチナのゲーム、高校生活の紹介)

イスラエル人・パレスチナ人参加者の体験発表

(23日)

イスラエル・パレスチナ問題に関するレクチャー、小討論会

(24日)お別れ会

に絡み合っている現実にとっても衝撃を受けたようでした。



紛争についてのレクチャーでは、イスラエル人・パレスチナ人・日本人参加者が「イスラエル・パレスチナの多様性」、「壁」、「教育」について模造紙にまとめ、高校生にレクチャーをし

ました。そのあと、トピックごとにブースに分かれて質疑応答の時間をとりました。普段ニュースなどを見ている伝わってこない、イスラエル・パレスチナの多様な側面を学ぶ機会となりました。



小討論会では、「イスラエル・パレスチナの未来に何を望むか」について話し合いました。紛争の解決策を複数の選択肢から選び、イスラエル人・パレスチナ人参加者と高校生がそれぞれ選択した解決案についての意見を述

べる時間をとりました。小討論会の中でのアイデンティティや国家についての話し合いは高校生にとって特に印象的だったようで、「自分自身や社会を考え直すきっかけになった」という声を多く聞きました。

小討論会の後はイスラエル・パレスチナの料理を参加者みんなで作ってから頂きました。食事後は、イスラエル人参加者の紹介によるユダヤ教の儀式であるシャバットや、パレスチナ人参加者の伝統的なダンスであるベリーダンスなどをして楽しみました。

3日目はお別れ会として参加者一人ひとりが感想を発表してから、全員で「上を向いて歩こう」を歌いました。そのあとは全員で寄せ書きをして、宿舎を後にしました。3日間ではありますが、お互いにとって忘れ難い大切な交流になったのではないかと思います。

## 総評

高校生プログラムは3つの目的をもとに構成されました。

1つ目の「イスラエル人・パレスチナ人参加者、日本人大学生、高校生が共有できる価値を探る」は、今回の合同学生会議の目的に基づき設定されました。私たち日本人が日本社会で生活するなかで、イスラエル人・パレスチナ人と関わる機会は少ないといえますが、それは高校生にとってはなおのことだと言えます。こうした社会の中で、お互いを知らないことが偏見を生んでしまうことも少なくありません。しかしながら、今回の「高校生プログラム」の中で、高校生参加者はお互いに会って意見を聞き、理解しようとする、また共に食事を

したり歓談したりすることなどを通して、お互いを自分となんら変わらない人間であることを理解できたかと思います。また、イスラエル人・パレスチナ人参加者にとっては、高校生から意見を聞き、理解することは、日本社会で報道されているイスラエル・パレスチナのイメージを直接聞く一つの機会になります。加えて、高校生参加者の意見を聞くことで、自分自身の考えを見つめ直すきっかけにもなったと思います。反省点としては日本人大学生が「高校生プログラム」の運営をサポートするような立場になり、日本人大学生がプログラムに主体的に関われなかったという点が挙げられます。しかし高校生参加者がプログラムに参加

して大学生と同じように交流の場に関わることで、合同学生会議の雰囲気も新たになり、三者間での交流を促進した面もあるといえます。



二つ目の目的は「高校生が社会で起きていることに目を向けるきっかけをつくる」です。初めにプログラム自体の反省点を挙げると、小討論会の話し合いの際に高校生の参加が少なくなってしまった点が挙げられます。小討論会の内容は高校生プログラムが始まる前に、イスラエル人・パレスチナ人参加者と高校生参加者で話し合いが行われました。イスラエル人・パレスチナ人参加者の間では「お互いに意見を聞きあうだけで反論はしない」という約束を前提に、イスラエル・パレスチナ問題の解決案について話し合うということを決めました。しかしながら「1 国家案・2 国家案」、「分離壁」、「難民」について話し合われたのですが、当日は話し合いがヒートアップしてしまい、日本人参加者で円滑に進行をすることが難しい状態になりました。イスラエル・パレスチナ問題にあまり触れたことのない高校生参加者たちにとっては、分かりにくくなってしまったと反省しています。しかしプログラム全体では第二の目的については当初の目的を達成できたといえるでしょう。特に小討論会での「国家」や「アイデンティティ」についての議論を通じて、高校生参加者は「まだ国家やアイデンティティ

とは何だろうか考える」や「日本は平和だから侵される危険がないのだと気付いた」と話し、真摯に考えている姿が伺えました。また、国際的な活動にさらなる興味を持った人や、イスラエル・パレスチナ問題により深く関わりたいという高校生参加者も出てきました。今後数年経った後も、高校生参加者が振り返り、考えを深められるようなプログラムとなってほしいと祈っています。



3 つ目の「事前準備を通した、イスラエル人・パレスチナ人参加者、日本人大学生間の交流の促進」という点では、高校生プログラムの2 日目に行われる「イスラエル・パレスチナ問題についてのレクチャー」のために、イスラエル人・パレスチナ人参加者と日本人参加者がグループに分かれて発表の準備が行われました。一つのトピックについての発表を共同で作り上げるということは、相手の意見を受け入れ、時に妥協をしながら進めなければならないことです。特に違う意見をもったイスラエル人・パレスチナ人参加者間では、簡単なことではないです。こうした観点から、この準備はお互いを理解し、共同して進む大切なプロセスになったと思います。しかし、これらの作業のために日本人参加者の、特に通訳などの労力が必要以上に割かれて、イスラエル人・パレスチナ人参加者と自由な対話をする時間を

減らしてしまったという問題点が残りました。 それに沿った合同学生会議の企画が必要に  
合同学生会議において何に重点を置き、どの なるのだと思います。  
ような交流形態を重視するのかを話し合い、

### 高校生のコメント

「私はイスラエル・パレスチナ問題の解決のためには第三者の介入が必要なのだと思っていたが、それが思った以上に難しいことだとわかった。ワークショップで私は自分の意見を言うことが全くできなかった。私は当事者たちの話を本当に理解することはできないし、この問題に対する姿勢、知識も彼らに比べて弱すぎる。だからと言ってあきらめずに、第三者も和平のために彼ら以上に強い気持ちを持ってこの問題に臨む必要があると思う。果たして今の国際社会はそれほどそれができているのかが気になる。

イスラエル人も、パレスチナ人も、とてもフレンドリーで良い人たちで、この人たちが互いを憎しみ合うことなど絶対起きてほしくないと思った。なんとかして和平が実現されることを強く願う」

「この2泊3日の経験は生涯を通して忘れられないものになったと思う。参加するまでの自分もイスラエル・パレスチナ問題に関しては興味を持っており、文献やドキュメンタリーを通して学んでいたが、それはあくまで他人の観を通して見聞きしたものであり、直接当事者から話を聞く機会はなかった。そもそもないのが普通だからだ。だがこのような貴重な経験を通して、直接生の声を聞くことができ、自分でものを考える下地ができた。(中略)この経験をへて、学ぶことの大切さ、対話することの大切さを知った。平和は対話によってしか構築されないと考えた。この経験をふまえて、今後の自分の糧としたい」

「イスラエル・パレスチナ紛争は結局どうなればよいのかわからなかったが、あの人達ほど国について考えている人がいれば、将来は明るいと思う。ワークショップのときのイスラエル人、パレスチナ人の勢いがとても印象に残っている。今後も第三者として意欲的にイスラエル・パレスチナについての知識を増やしようと思う」

## むさしの交流イベント

### 「～時をこえ、地域をこえる平和への思い～」

日時:8月28日(木) 14:00～17:00

会場:【第一部】武蔵野スイングビル 11階  
レインボーサロン

【第二部】グリーンパーク・遊歩道  
(いずれも東京都武蔵野市)

来場者:7名

#### 目的

- 来場者とイスラエル人・パレスチナ人参加者との対話による交流を通して来場者のイスラエル・パレスチナに対する関心を喚起する
- 戦争体験された来場者に戦時中の話をしただき、イスラエル人・パレスチナ人参加者が日本の戦争について理解を深める

#### イベントの様子

このイベントはイスラエル・パレスチナ人参加者と来場者間の対話による交流を重視し、第一部ではメインであるグループトークを行いました。はじめにイスラエル人・パレスチナ人参加者がそれぞれの好きな文化行事を紹介しました。これは中東文化を紹介することと、話しやすい雰囲気を作ることを目的としていました。

- 平和への思いをこめたスピーチとオリーブ植樹を通して、平和の価値を改めて考えるきっかけをつくること。

#### 内容

##### 【第一部】

- ① 開会式、代表挨拶(15分)
- ② グループトーク(65分)

イスラエル・パレスチナ人参加者による文化紹介と紛争の中で生きる思いや経験についての話、戦争体験をされた来場者による戦時中の話

##### 【第二部】

- ③ イスラエル・パレスチナ人参加者からのスピーチ(15分)
- ④ オリーブ植樹(15分)



次に過去から現在の時間軸に沿いイスラエル人・パレスチナ人参加者が紛争下で経験したつらい体験や合同学生会議以前に相手に対して抱いていたイメージ、また合同学生会議を通して紛争や相手に対して感じた率直な思いを語りました。来場者のなかには、戦争を経験された方もいて、そのような方にも当時の体験や思いを話していただき、イスラエル・パレスチナ人参加者は日本の戦争の歴史に触れることができました。また戦争体験がない来



場者からも活発に質問が出されました。

イベント第二部はグリーンパーク・遊歩道へ場所を移し、武蔵野市市長から挨拶をいただいた後、イスラエル・パレスチナ人参加者が平和への思いを込めたスピーチを行いました。そして最後に、平和の象徴であるオリーブを日本人大学生とイスラエル人・パレスチナ人参加者、来場者の手により植樹しました。イベントは和やかな雰囲気でも終了しました。



## 総評

イベントのメインであるグループトークでは来場者に満足していただけたようです。またグループトークはイスラエル・パレスチナの紹介に終わらず、双方向の交流になりました。この理由としては対立するイスラエル・パレスチナ両地域の状況や、イスラエル人・パレスチナ人参加者が互いにどのような思いを抱いているのかを、率直かつ冷静に伝えることができたことがあります。そしてこれは事前にイスラエル人・パレスチナ人参加者とイベントの目的を共有できたことによると考えられます。

また、グループに分かれての交流により話

しやすい雰囲気をつくることができ、戦争を経験された来場者から若い世代の来場者までそれぞれの思いや疑問を発言することができたことも理由に挙げられます。

反省としては、来場者数が少なかったことが挙げられます。これはイベント内容の決定が遅くなったために広報内容を魅力的なものにできなかったことや、イベント日程が平日の昼間であったことが理由として考えられます。合同学生会議中の対外イベントの大きな目的の一つは、日本社会へイスラエル・パレスチナ問題について情報発信することです。来期の

対外イベントは、早い時期に、準備に着手でき う日程にも配慮したいと思います。  
るよう、また広い層の人々に来ていただけるよ

### 来場者のアンケートより

- ・深刻な話ではなく、文化紹介というつつきやすい内容から始めるのは良いアイデアだと思います。
- ・それぞれの立場や意見が聞けたのが為になりました。
- ・イスラエル・パレスチナの方々の生の声で問題に関して感じていることを聞け、自分にとっても身近なことのように感じました。
- ・立派なスピーチであった。態度が堂々としていてよかった。
- ・グループトーク・フリートークの時間がもう少しあればうれしいです。
- ・話すことの大事さ、話し合うことからことがはじまる。  
平和への思いが同じであることをうれしく思いました。
- ・とても良かったです。平和のシンボルを一緒に植えることは、参加者にとっても来場者にとってもとても意味のあるものだと思います。

# シンポジウム

## 「～対話からうまれるもの～」

日時: 8月29日(金) 18:00～20:00

会場: JICA 地球ひろば 3階講堂

(東京都渋谷区)

来場者: 29名

### 目的

- ① イスラエル人・パレスチナ人参加者が、合同学生会議での対話を通して得た新たな視点、意識の変化、そして未来に向けての思いを伝えること。
- ② イスラエル人・パレスチナ人の学生から直接話を聞く機会を提供することで、市民の方々の両地域で続く紛争に対する理解を深め、関心を喚起すること。

### 当日の様子

基調講演では、臼杵教授に両者の歴史観に焦点を当ててその相違や対話することの難しさを話して頂きました。具体的には、イスラエルの近代史としてのシオニズム運動やホロコーストの歴史、パレスチナの近代史としてのオスマン帝国期のアラブナショナリズムの台頭やパレスチナ人の受難の歴史について説明がありました。イスラエル人・パレスチナ人参加者によるスピーチでは、合同学生会議前に抱いていた相手への恐怖や疑いの念が、対話を経て友情へと変わり、将来への希望を抱くに至ったというような合同学生会議で得た価値をそれぞれの言葉で伝えました。最後の質

### 内容

- 臼杵陽教授(日本女子大学文学部)による基調講演  
「パレスチナ・イスラエルの歴史観の交錯～独立／ナグバから60周年の語り～」(40分)
- 平山祐理(第6期 JIPSC 代表)による合同学生会議概要・経過の報告(5分)
- イスラエル・パレスチナ人会議参加者によるスピーチ(45分)
- 来場者からの質疑応答(20分)

疑応答の時間では、来場者から宗教とアイデンティティーの関連性、イスラエル・パレスチナにおける教育の可能性などに関する質問がありました。



### 総評

今回のシンポジウムでは多様な年齢層の方々が来場され、真摯に講演やスピーチを聞かれていました。イスラエルが独立し、パレスチナの悲劇が始まった年といわれる 1948 年から 60 周年を迎えた節目に、講演で双方の歴史を振り返ることは意義深いものでした。講演で学術的な見地から両者の歴史認識の違いを理解した後に、今回の合同学生会議での対話から得た学びを伝えることで、来場者の

方の紛争に対する理解を深めることができたと思います。

質疑応答の際は、非常に多くの質問があがり、シンポジウム終了後も来場者の方々とイスラエル・パレスチナ人参加者との歓談が尽きない光景がありました。日本から遠く離れた地で起きている紛争問題に、来場者の方々が多大な関心を抱いてくださり、シンポジウムは盛況に終わりました。

### アンケートより

- ・今までメディアを通してしか聞いたことがなかったイスラエル人とパレスチナ人の生の声が聞けてよかったです。
- ・それぞれの立場からそれぞれの意見を話していたが、共通点がいくつもあって面白かった。
- ・憎しみをいだきかねない関係の両地域の人同士がこうやってにこやかに語れることは素晴らしいと思いました。
- ・このような国や立場の違いを超えた協力と努力を続けることが大切だと思いました。
- ・参加者本人の声を聞ける今回はとても貴重なものでした。今後はこの会議の参加者が平和のために活躍できるのだと感じました。
- ・平和への願い、互いを理解しようという意識の高い若者たちがその架け橋になってくれたらいいと思いました。
- ・イスラエル人とパレスチナ人が理解しあえるのだということを目前にして感じる事ができた。